

# 平成27年福岡県職業高等学校教員への アンケート調査からみる教育現場の実態

経 志 江

## はじめに

我が大学では、平成27年から地域との連携を一層強化し、これまでの蓄積を生かして新たな科目を設けるなど地域へのさらなる貢献を目指している。こうした流れの中、教職課程では、我が大学の卒業生で現職の県立高等学校教諭を招いて講演会を開き、教育現場の生の声を教員を目指す学生に伝え、また、地域の教育課題を把握するため、さまざまな現場調査を行っている。本論文の題目で記した平成27年福岡県職業高等学校教員へのアンケート調査は、その中の1つであり、平成27年1月に行った「教育活動に関するアンケート（教員）」（添付資料）の調査結果の一部である。ちなみに同時期、「教育活動に関するアンケート（管理職）」も行った。

この平成27年1月の調査は、我が大学教職課程の責任者であり教務部長を務めている友枝文也氏がこれまでの福岡県公立高等学校校長や教育庁理事などの経歴で築いた人脈を生かし、県下188高等学校を対象として質問紙の形式で行った。

特色として主に2点がとりあげられる。

1点目は、特徴的な地域を対象としていることである。平成27年の全国公立高等学校偏差値ランキングを一瞥すると、最上位のSランクの福岡県立高等学校が5学科あり、この数は47都道府県中5位にあたる。一方、最下位のGランクの福岡県立高等学校も16学科あり、この数は47都道府県中4位にあたる。福岡県は学力の幅が非常に広いといえる。このような福岡県立高

等学校を調査対象とすることで、多様な高等学校の実態を見ることができる。

2点目は、「教育活動に関するアンケート（教員）」は各校8名の教員を調査対象として行ったことである。従来、高等学校の教育改革に資する調査研究は、研究対象を生徒側や管理職側とする場合が多かった。このような視角からの研究蓄積は相当数見られる。一方、教育現場の最前線でその実体を担う教員の立場からの調査研究は少ない。

本論文は、こうした調査研究の実態を踏まえ、まず、平成27年の「教育活動に関するアンケート（教員）」（以下、平成27年調査）の一部である職業高等学校へのアンケート調査の結果を分析対象とする。こうした分析によって、職業高等学校の教育活動の特色を明らかにし、現場に潜んでいる教育的課題を浮き彫りにする。今後の職業高等学校における個別的な課題研究に基本的情報を提供できることを願う。

## 1. 職業高等学校に対するアンケート調査の回収状況と対象について

### (1) 回収状況について

県下の職業高等学校は、計16校ある。種別を見ると、工業高等学校（以下、工業高校）は9校、商業高等学校（以下、商業高校）は4校、農業高等学校（以下、商業高校）は3校である。その他の職業系の高等学校は5校あるが、性格がやや違うため、本論文では取り扱わない。

平成27年調査では、工業高校の9校、商業高校の4校中の3校、農業高校の3校からアンケートの回答を得た。各校に8人分のアンケートを依頼したが、完全に回収できていない学校も若干ある（表1）。

### (2) 調査対象について

9つの工業高校から計72人分のアンケートを回収した。うち、男性教員は58人分、女性教員は14人分、男女の比例はおおよそ8：2である。3つの商業高校から計24人分のアンケートを回収した。うち、男性教員は14人分、女

表1 平成27年県立職業高校アンケート回収状況

職業別	学校名	回収数(回収率)
工業高校	苅田工業高校	8 (100%)
	小倉工業高校	8 (100%)
	戸畑工業高校	8 (100%)
	八幡工業高校	8 (100%)
	香椎工業高校	8 (100%)
	福岡工業高校	8 (100%)
	三池工業高校	8 (100%)
	八女工業高校	8 (100%)
商業高校	浮羽工業高校	8 (100%)
	小倉商業高校	8 (100%)
	若松商業高校	8 (100%)
農業高校	宇美商業高校	8 (100%)
	福岡農業高校	6 ( 75%)
	糸島農業高校	8 (100%)
	八女農業高校	7 ( 88%)

性教員は10人分、男女の比例は約6：4である。3つの農業高校から計21人分のアンケートを回収した。うち、男性教員は14人分、女性教員7人分、男女の比例は約7：3である（表2）。

これは全国の高校における教員全体の男女比例の7：3とほぼ一致している<sup>(1)</sup>。が、工業高校の教員の女性比はやや少ない一方、商業高校の教員の女性比はやや多い傾向があることが伺える。

回収した全体125人分のアンケートを一瞥すると、年齢層は20歳代から50歳代までで、年齢層構成別の教員数の割合はほぼ均等であることがわかる（表3）。幅広い世代の意見を反映していると考えたい。

(1) 「教員の女性比（時代比較、国際比較）」データえっせい、[http://tmaita77.blogspot.jp/2012/03/blog-post\\_04.html](http://tmaita77.blogspot.jp/2012/03/blog-post_04.html)、2016年2月10日閲覧。

表2 調査対象となる教員の性別

職業別	学校名	男(人数)	女(人数)
工業高校	荏田工業高校	8	0
	小倉工業高校	4	4
	戸畑工業高校	6	2
	八幡工業高校	6	2
	香椎工業高校	7	1
	福岡工業高校	6	2
	三池工業高校	7	1
	八女工業高校	7	1
	浮羽工業高校	7	1
商業高校	小倉商業高校	5	3
	若松商業高校	5	3
	宇美商業高校	4	4
農業高校	福岡農業高校	4	2
	糸島農業高校	5	3
	八女農業高校	5	2

表3 調査対象となる教員の年齢層構成別の教員数

職業別	学校名	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代
工業高校	荏田工業高校	2	2	1	3
	小倉工業高校	2	2	2	2
	戸畑工業高校	2	2	2	2
	八幡工業高校	2	2	2	2
	香椎工業高校	2	2	2	2
	福岡工業高校	2	2	2	2
	三池工業高校	2	2	2	2
	八女工業高校	2	2	2	2
	浮羽工業高校	2	3	3	0
商業高校	小倉商業高校	2	2	2	2
	若松商業高校	0	2	3	3
	宇美商業高校	2	2	2	2
農業高校	福岡農業高校	2	2	2	0
	糸島農業高校	2	2	2	2
	八女農業高校	1	2	2	2

## 2. 教職に就いた理由と満足度について

表4に示したように、教職に就いた理由についてもっとも多く選択されていたのは「先生との出会い」と「子どもが好き」という選択肢であった。

「先生との出会い」を選んでいたのは、工業高校が72名中の47名で約65%、商業高校が24名中の17名で約71%、農業高校が21名中の12名で57%である。

「先生との出会い」は教職に就いたもっとも重要な理由となっており、とくに工業高校と農業高校はその傾向が強い。

「子どもが好き」を選んでいたのは、工業高校が72名中の35名で約49%、商業高校が24名中の9名で約38%、農業高校が21名中の7名で約33%である。

「先生との出会い」に続き、2番目の理由となっている。

また、自由記述欄の「その他」には、英語や技能など自分の専門を生かしたいと書いた教員が多く、職業高校ならではの特徴が見られる。その他、部活動教育に従事したい、海外業務（途上国）に従事したとき教育が最も重要

表4 教職に就いた理由と満足度

		工業高校	商業高校	農業高校
教職に就いた理由	子どもが好き	35 (49%)	9 (38%)	7 (33%)
	近い先輩が教員	2 (3%)	0	0
	親・兄弟等が教員	12 (17%)	4 (17%)	5 (24%)
	先生との出会い	47 (65%)	17 (71%)	12 (57%)
	社会的地位	3 (4%)	0	0
	安定した生活	12 (17%)	5 (21%)	3 (14%)
	他の就職に失敗	3 (4%)	1 (4%)	0
	何となく	2 (3%)	1 (4%)	2 (10%)
	その他	16 (22%)	6 (25%)	3 (14%)
満足度	満足している	57 (80%)	18 (75%)	17 (81%)
	やや不満がある	8 (11%)	6 (25%)	3 (14%)
	不満である	0	0	0
	転職したい	1 (1%)	0	0
	特にない	1 (1%)	0	1 (5%)

であると感じた、一生をかける価値がある仕事だと思っていることなど自分の経験や価値観を理由に教職を選んだ教員もたくさんいた。

ひとつ言えることは、「他の就職に失敗」したなど消極的な理由で教職を選んだ者が極めて少ないことである。

こうした理由と比例するように、教職に就いたことに満足している教員の比率は高く、工業高校では約80%、商業高校では約75%、農業高校では約81%を占めている。平均して約8割の教員は教職に満足していることがわかる。

一方、教職に就いたことに「やや不満がある」と思っている教員もいる。もっとも多いのは商業高校の教員で約25%を占めている。その理由については定かではないが、アンケートをみるかぎり、自己研鑽に努めるための時間的な余裕がないこと（表5）、生徒とのコミュニケーションがうまくいかないこと（表6）、現在の生活や退職後の生活に漠然とした不安があること（表7）などに起因すると思われる。

### 3. 勤務時間、教材研究や自己研鑽の時間について

今回の調査でもう1つ分かったことは、職業高校教員の勤務日・1日当たりの平均勤務時間が非常に長いことである（表5）。

工業高校の場合、勤務日に1日当たり11時間以上の教員は約24%、12時間以上の教員は約33%、13時間以上の教員は約22%であった。約8割の教員は11時間を超えており、6割以上の教員は12時間を超えていた。

この傾向は、商業高校も農業高校も見られる。商業高校の場合、11時間以上は約8割で、12時間以上は半分を超えていた。農業高校は、11時間以上は約6割で、12時間以上は約3割であった。農業高校は工業高校と商業高校よりやや少ないものの、いずれも長く勤務していることがわかる。

調査の条件は同様ではなく、単純に比較することはできないが、文部科学省が2005年に行った高校教員の勤務状況に関する調査では、勤務日・1日当たりの平均勤務時間は10時間程度であった<sup>2)</sup>。10年経っても高校の長時間勤

表5 勤務日・1日当たりの平均勤務時間、教材研究や自己研鑽の時間

		工業高校	商業高校	農業高校
勤務日 平均 勤務 時間	1日当たり9時間以上	2 (3%)	4 (17%)	1 (5%)
	1日当たり10時間以上	6 (8%)	1 (4%)	6 (29%)
	1日当たり11時間以上	17 (24%)	6 (25%)	6 (29%)
	1日当たり12時間以上	24 (33%)	3 (13%)	4 (19%)
	1日当たり13時間以上	16 (22%)	8 (33%)	2 (10%)
	1日当たり14時間以上	4 (6%)	2 (8%)	0
	1日当たり15時間以上	2 (3%)	0	0
	1日当たり16時間以上	1 (1%)	0	0
教材 研究 の 時 間	毎日3時間以上	3 (4%)	2 (8%)	3 (14%)
	毎日3時間未満	21 (29%)	11 (46%)	3 (14%)
	隔日3時間以上	1 (1%)	5 (21%)	2 (10%)
	隔日3時間未満	15 (21%)	1 (4%)	5 (25%)
	週2日程度3時間以上	15 (21%)	3 (13%)	4 (19%)
	週2日程度3時間未満	12 (17%)	1 (4%)	3 (14%)
	週1日程度3時間以上	3 (4%)	1 (4%)	0
	週1日程度3時間未満	2 (3%)	0	1 (5%)
自己 研 鑽 の 時 間	全くない	2 (3%)	0	4 (19%)
	あまりない	54 (75%)	20 (83%)	14 (67%)
	ある	16 (22%)	1 (4%)	3 (14%)
	努めることはない	0	0	0
	その他	0	0	0
	殆どしない	0	0	0

務の状況はほとんど改善されていないことが伺える。

一方、教材研究の時間が不足していることが容易に推察できる。表5に示したように、工業高校の場合、約96%の教員は教材研究の時間が1日当たり3時間未満で、約65%の教員は隔日3時間未満で、約24%の教員は1日当たり1時間もないと考えられる。商業高校の場合、約92%の教員は教材研究の

(2) 文部科学省「教員勤務実態調査（高校）報告書」[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/07/05/1308071\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/07/05/1308071_2.pdf)、2016年2月11日閲覧。

時間が1日当たり3時間未満で、約25%の教員は隔日3時間未満であった。農業高校の場合、約86%の教員は教材研究の時間が1日当たり3時間未満で、約62%の教員は隔日3時間未満であった。いうまでもないが、教材研究の時間は授業時間の数倍も確保されなければ、良い授業ができるとは思えない。教育の崩壊がいわれている今日、教材研究の時間の確保は教育の質の保障に繋がる近道であろう。

さらに、教材研究以外の自己研鑽の時間を覗いてみると、「全くない」と「あまりない」を合わせると、工業高校の教員は約78%、商業高校の教員は約95%、農業高校の教員は約86%であった。大半の教員は自己研鑽の時間がほとんどないことがわかる。

勤務時間が長いにもかかわらず、教材研究や自己研鑽の時間が少ない背景には、校務分掌の負担が多いと感じる教員が多いことは表6でわかる。校務分掌上の業務負担について「強く感じている」と「多少感じている」と合わせると、工業高校は約58%、農業高校は約62%、商業高校は約57%であった。約6割の教員は校務分掌上の業務負担を感じている。その理由について、もっとも多いのは「業務内容が多い」ことで、その次は「他の職員の協力が得られない」ことと「業務内容が難しい」ことであった。教職員同士の連携がうまく機能していないことが伺える。

表6 校務分掌上の業務負担について

		工業高校	商業高校	農業高校
校務分掌上の 業務負担	強く感じている	4 (5%)	4 (17%)	3 (14%)
	多少感じている	38 (53%)	9 (38%)	10 (48%)
	あまり感じていない	20 (28%)	10 (42%)	6 (29%)
	感じていない	10 (14%)	0	2 (10%)
負担を感じる 理由	業務内容が多い	21 (29%)	8 (33%)	6 (29%)
	業務内容が難しい	3 (4%)	2 (8%)	2 (10%)
	他の職員の協力が得られない	8 (11%)	2 (8%)	1 (5%)
	トラブルが多い	3 (4%)	1 (4%)	0
	よくわからない	1 (1%)	0	0
	その他	1 (1%)	3 (13%)	2 (10%)



#### 4. 教員の資質と能力について

教員にとって教科指導力以外に必要な資質と能力について、工業高校と商業高校でもっとも選択されたのが「コミュニケーション能力」で約38%と約40%で、続いて「生徒指導力」で約24%と約23%であった。農業高校では「生徒指導力」で約40%、続いて「コミュニケーション能力」で約23%であった。「コミュニケーション能力」と「生徒指導力」は、教員にとって教科指導力以外でもっとも重要な資質・能力と認識されていた（表7）。

こうした重要な資質と能力を高めるために行っていることとして、「教育研究会等での活動」と答えているのが約43%であった。一方、「教職員団体等の学習会での活動」は約12%であった。教職員団体等の自主的な学習会の機会は、行政が主催する教育研究会よりはるかに少ないことが伺える。

表7 教員の資質・能力について

		工業高校	商業高校	農業高校
教科指導力 以外に必要な 資質・能力	生徒指導力	18 (25%)	7 (29%)	10 (48%)
	進路指導力	3 (4%)	4 (17%)	3 (14%)
	人権指導力	5 (7%)	1 (4%)	1 (5%)
	人間関係調整力	17 (24%)	5 (21%)	4 (19%)
	コミュニケーション能力	29 (40%)	12 (57%)	7 (33%)
	その他	4 (6%)	1 (4%)	0
資質・能力を 高める活動の 参加	教育研究会等での活動	33 (46%)	7 (29%)	5 (24%)
	地域社会での活動	12 (17%)	1 (4%)	2 (10%)
	福祉医療施設での活動	1 (1%)	0	0
	教職員団体等の学習会での活動	9 (13%)	6 (25%)	1 (5%)
	その他	9 (13%)	4 (17%)	1 (5%)
	特に行っていない	13 (18%)	8 (33%)	6 (29%)
資質・能力を 高めるために 必要なもの	校内研修の充実	18 (25%)	8 (33%)	5 (24%)
	教育委員会主催の研修の充実	23 (32%)	5 (21%)	5 (24%)
	教育研究団体等への加入	4 (6%)	1 (4%)	0
	教職員団体等の加入	2 (3%)	1 (4%)	0
	地域社会活動参加	12 (17%)	7 (29%)	3 (14%)
	その他	15 (21%)	6 (25%)	1 (5%)
	特になし	1 (4%)	0	1 (5%)

## 5. 教員の生活的な不安について

現在の経済的な不安について、「とても不安である」「漠然とした不安がある」を合わせると不安と答えた人は、工業高校で約62% (13+49)、商業高校で約35% (5+35)、農業高校で約57% (19+38) と工業高校と農業高校がやや高いもののおおむね半数であった。社会的には不安要素の枚挙にいとまない昨今、半数しか不安に感じていないというのはむしろ教員という地位に安定感を感じているといえるのではないだろうか。農業高校の「あまり不安を感じない」約43%、という数字は非常に高い数字といえるだろう。

ところが話が退職後のこととなると、様子が変わってくる。「とても不安である」「漠然とした不安がある」を合わせて不安と答えた人は、工業高校で約70% (21+49)、商業高校で約75% (4+71)、農業高校で約76% (14+62)、と高い数字が並ぶ。現在の生活にはそれほど大きな不安を感じないものの、退職後となるとこれからの社会がどのように変化していくのか予測不能な面もあり、不安と感じる人の割合が上がっているのであろう。特に現在の生活に半数の人が「あまり不安を感じない」と答えていた商業高校の教員の約75%が退職後の生活には不安を感じていることは、商業という職種の盛衰が短いスパンで繰り返されていることを反映しているようである。

表8 教員の不安について

		工業高校	商業高校	農業高校
現在の生活の 経済面	とても不安である	9 (13%)	1 (5%)	4 (19%)
	漠然とした不安がある	35 (49%)	7 (30%)	8 (38%)
	あまり不安を感じない	23 (32%)	8 (33%)	9 (43%)
	考えたことがない	5 (7%)	1 (4%)	1 (5%)
退職後の生活	とても不安である	15 (21%)	1 (4%)	3 (14%)
	漠然とした不安がある	35 (49%)	17 (71%)	13 (62%)
	あまり不安を感じない	13 (18%)	5 (21%)	4 (19%)
	考えたことがない	9 (13%)	1 (5%)	1 (5%)

## 6. おわりに

職業高校教員アンケート調査の分析から、少なくとも3つのあらたな知見をえることができた。

1つは、職業高校の教員陣には教職に憧れて教員になった者が圧倒的に多いことである。「先生との出会い」と「子どもが好き」だから、という理由が多くを占めている。教員になりたい人が教員になっているという、一見当たり前のような事実であるが、これは学校教育にとってこの上ない財産であるといえよう。

2つは、勤務時間が長く、教材研究、とりわけ自己研鑽の時間がほとんどないことである。教員の勤務時間が長いことはこれまでしばしば報告されてきたが、今回の調査では職業高校はとくに長いような印象を受ける。より厳密な調査が必要である。

3つは、経済的な面において、現時点で明確な不安をもっている教員は比較的少ないことである。教員の不安要素を減らすことは、教育環境を整える上で重要なことである。よって、現状から悪化させることなく少しでも良くなる方向を目指すことが望まれる。

アンケートの最後で自由記述にて、教員生活を通じて「喜びをかんじたこと」を聞いたところ、工業高校、農業高校、商業高校の種別にかかわらず、生徒が目標を達成して喜んでいる姿をみたこと、生徒の成長を感じたこと、進路が決まったこと、卒業で生徒を送り出したことなど、生徒とのかかわりの中で大きな手ごたえを感じていることがわかった。逆に「辛い思いをしたこと」に関しては、生徒が亡くなったこと、退学者を出したこと、思いが通じず指導がうまくいかなかったこと、などが記されていた。生徒に真剣に対峙し向き合ったものの思うような成果が出なかった時、苦悩する教員の姿が垣間見える。

学習指導や生徒指導は、教員にとって本来の教育活動である。それに専念できる環境づくりはなりより重要であり、教員の能力を発揮できる条件である。行政側の職場環境づくりへの支援を期待する。

(添付資料)

平成 ( ) 年 ( ) 月実施

### 教育活動に関するアンケート (教員)

下記の問いについて、該当する項目一つ又は(複数回答可)は該当する項目にをしてください。また、1～3及びの欄、「その他」への( )には、必要な事項をご記入願います。

- 1 あなたの ア性別 イ年齢 ウ担任経験年数(本年度含む)をお答えください。  
ア 性別 男性 女性 イ 年齢( )歳代 ウ 担任経験( )年間
- 2 あなたの ア専門教科 イ校務分掌 ウ部活動顧問をお答えください。  
ア 専門教科( ) イ 校務分掌( )  
ウ 部活動顧問( )
- 3 あなたの日頃の ア出勤時間 イ帰宅時間をお答えください。  
ア 出勤時間( 時 分)頃 イ 退勤時間( 時 分)頃
- 4 あなたが教職に就いた理由は何ですか。(複数回答可)  
子どもが好き 近い先輩が教師 親・兄弟等が教師 先生との出会い  
社会的地位 安定した生活 他の就職に失敗 何となく  
その他( )
- 5 あなたは教職に就いたことに満足していますか。  
満足している やや不満がある 不満である 転職したい 特らない
- 6 現在クラス担任として学級経営上もっとも重視していることは何ですか。  
意欲ある学習態度 規律ある生活態度 望ましい集団形成 担任ではない  
その他( )
- 7 あなたは教科指導力を高めるための教材研究は概ねどの程度行っていますか。  
毎日3時間以上 隔日3時間以上 週2日程度3時間以上  
週1回程度3時間以上 毎日3時間未満 隔日3時間未満  
週2日程度3時間未満 週1回程度3時間未満
- 8 あなたは特別支援教育が高等学校でも必要だと思いますか。  
強く感じている 多少感じている あまり感じていない 感じていない
- 9 あなたが正または副として担当しているクラスに特別支援が必要と思われる生徒はいますか。  
複数いる 一人はいる いない わからない
- 10 特別支援教育が必要な生徒に関する学年会等での情報交換は行われていますか。  
定期的に行っている 不定期に行っている 行っていない わからない

- 11 あなたは教員の教科指導力以外でもっとも必要な資質・能力は何だとお考えですか。  
 生徒指導力  進路指導力  人権教育力  人間関係調整力  
 コミュニケーション能力  その他 ( )
- 12 あなたは教員としての資質・能力を高める活動を行っていますか。  
 教育研究会等での活動  地域社会での活動  福祉医療施設での活動  
 教職員団体等の学習会での活動  
 その他 ( )  特に行っていない

※裏面もありますのでよろしくをお願いします。

- 13 あなたは教員としての資質・能力を高めるために何が必要だと思いますか。  
 校内研修の充実  教育委員会主催の研修の充実  教育研究団体等への加入  
 教職員団体等の加入  地域社会活動参加  
 その他 ( )  特にない
- 14 あなたは教材研究以外で自己研鑽に努めるための時間的な余裕はありますか。  
 全くない  あまりない  ある  自己研鑽に努めることはない  
 その他 ( )  殆どしない
- 15 あなたは教科指導以外で得意とする教育活動は何ですか。(複数回答可)  
 簿指導  キャリア形成指導  進学指導  保健・指導  
 体育系部活動  文化系部活動  人権教育指導  生徒会指導  
 その他 ( )  特にない
- 16 あなたは校務分掌上の業務を負担に感じていますか。  
 強く感じている  多少感じている  あまり感じていない  感じていない
- 17 16で強く感じている及び多少感じていると答えたあなたにお尋ねします。
- ①負担に感じる理由は何ですか  
 業務内容が多い  業務内容が難しい  他の職員の協力が得られない  
トラブルが多い  よくわからない  
 その他 ( )
- ②あなたには担当したくない校務分掌はありますか  
 現在の担当を含めすべて  現在の担当を除き一部  現在の担当のみ  
 特にない
- 18 あなたは教育活動上の悩みなどを主に誰に相談しますか。(複数回答可)  
 同僚等  主任主事等  管理職  家族  教師以外の友人等  
 その他 ( )

19 あなたは現在の生活に経済的な不安がありますか。

- とても不安である  漠然とした不安がある  あまり不安は感じない  
 考えたことがない

20 あなたは退職後の生活に不安を持っていますか。

- とても不安である  漠然とした不安がある  あまり不安は感じない  
 考えたことがない

21 教員生活を通じて教育活動上喜びを感じたことや辛い思いをしたことをご記入願います。

〈喜びを感じたこと〉

--

〈辛い思いをしたこと〉

--

ご協力ありがとうございました。